【書　評】

鯵坂学 著
『都市移住者の社会学的研究』
（『都市同郷団体の研究』増補改題）

法律文化社（2009 年）284 ページ（5,700 円）

飯田　剛史
IIDA Takafumi

本書は、都市移住者の同郷団体をめぐる著者の継続的な研究を集成して、新たな都市化論を提示しようとするものである。これまでの都市化論では、「共同体の解体」すなわち近代化のなかで農村から都市への急激な人口移動にともない農村共同体は解体し、都市も共同性を構築できぬままさまざまな社会問題の温床となり、人々は砂粒のような大衆となって疎外された生活を送っている、という概念が暗黙のうちに前提とされてきた。しかし、著者は、都市移住者の同郷団体と出身村との関係に焦点をおく一連の研究によってこのような都市社会学神話を打破し、都市住民の実像に迫ろうとしている。

序章「都市移住者と都市同郷団体論の視座」では、本書の理論的なねらいが示される。著者が提起しようとするのは、アーバニズム論にみるような一方向的な都市化ではなく、「都市－農村の相互浸透の螺旋的「都市化」」である。

これまでも、都市の中の「擬制村」「第二のムラ」（神島二郎）の指摘はあったが、それらは都市民の中の農村的性格の残存あるいは近代化の中の遅れた部分の残存として扱われ、積極的な位置付けはなされてこなかった。そのなかで都市移住者の実態とくに同郷団体に注目して先駆的な研究を導いてきたのは松本通晴（同志社大学）教授であった。著者をはじめとする松本門下のグループは、このモチーフを受け継ぎ一連の研究を発展させてきた。

第 1 章「都市移住者の就業構造」では、階層的視点から二つのパターンが示される。すなわち〔高学歴・就学移動・同窓縁（学閥）・都市上中層への移動〕と〔低学歴・就業移動・同郷縁・都市下層への移動〕のパターンである。下積みの都市移住者にとって同郷関係、同郷団体は「生き抜き戦略として」大きな機能を果たしてきた。

第 2 章「都市形成と同郷団体」では、業種と居住地を軸として 4 つの型、すなわち同業種・集住型、多業種・集住型、同業種・分散型、多業種・分散型、が立てられ、時間とともに業種は多様化し、居住は分散化の傾向を帯びるとされる。そのなかで都市の特定地域は同郷団体が設置されるなど結節点としての性格を維持してゆく。

大阪における石川県出身者の公衆浴場業展開の事例研究は誠に興味深く読ませて頂いた。

第 3 章「都市同郷団体の地域空間構造：全国市町村調査より」では、同郷団体の全国的存在が立証されその空間構造が示される。すなわち北海道、東北、甲信越出身者は東京および最寄りの地方大都市に 2 拠点を有し、九州、沖縄、四国、中国、北陸出身者は東京および京阪神と最寄り地方大都市に 3 拠点を有することが示される。

第 4 章「都市移住者と過疎地域：他出家族員の

出身集落への帰郷」で、著者は、従来のプル－プッシュ論のようなゲゼルシャフトリッヒな関係に対してソーシャルな関係に着目する。出郷者は出身村と、墓参、正月の里帰り、農業の手伝い、祭り参加、仕送り、寄付、家産管理などさまざまなソーシャルナな関係を継続し、それが特に過疎地域では地域維持に不可欠の役割を果たしているという認識が示される。

第 5 章「都市住民と故郷との関係：広島市高陽ニュータウン調査より」では、ニュータウン居住者と最寄りの出身町村の両親との間に頻繁な相互訪問や助け合いとくに農繁期の手伝いがなされていることが示される。

第 6 章「国際移住と同郷的つながり、エスニック・グループ」では、同郷的つながりは、日本国内の農村－都市関係にとどまらず、外国人労働者や移民、「在日」住民の生活にも重要な意味をもつことが指摘され、「都市－農村関係を媒介する同郷的関係は社会の基層として普遍的にある」と論じられている。

かくして著者の結論は「現代の都市化は、国際的・国内的な都市－農村関係の相互浸透による螺旋的な都市化である」と要約される。

評者は、大阪で韓国済州島出身者の同族団体や同郷団体の調査をしたことがあるが、本書で著者が明らかにした論点の多くはそのまま適合している。大阪と済州島を結ぶ「国境を越えた生活圏」が成立しているのである。ただこれらの団体の活動に熱心なのは、在日一世であり二世になっても活動は受け継がれるが、三世になると、故郷意識そのものが大きく変容してくる。すなわち三世・四世の人々にとって自分の出身地については、「韓国」ないし「朝鮮」としての出身意識あるいは「民族意識」が前面に出て来て、済州島という故郷意識は希薄化してくるのである。

日本人の場合でも、同郷意識、同郷団体の意味は世代とともに希薄化していくと考えなければならないであろう。第三世代にとっては都市が自らの故郷になる。世代進行とともに、消滅する同郷団体もあるだろうし続いている団体でもその性格は変わってきているはずであろう。

もう一点ちょっと気になったのは、低学歴・就業移動で同郷縁にたよる都市移住者を著者は「下層」と位置づけていることである。高学歴・就学移動の「上層」都市民にたいして相対的に「下層」という意味であろうが、一般的には、「下層」という語感は、貧困など深刻な社会問題とつながる階層と結びつくのではないだろうか。著者が研究する人々は、「下層」というより都市中間層ないし庶民層と呼ぶほうがいいのではないだろうか。

都市社会学は、従来、都市の社会問題（スラム、犯罪、貧困、最近ではニート、派遣切りなど）に関心を集中させながら、中間層、庶民層の生活実態は関心の埒外においてきたように見える。昭和 30 年代頃までは、高学歴層（いわゆる旧中間層）は数％であり、都市住民の大多数は義務教育のみの庶民あるいは下積み層であった。（昭和 40～50 年代に大学の大衆化によりこの布置は変化する。すなわち大学卒のサラリーマン層が新たな中間層を構成するようになる。）

著者の研究は、都市中間層ないし庶民層の実像に同郷縁、同郷会の視角から迫ろうとしているといえる。著者はさらに、同郷団体を町内会、自治会とともに地域住民集団の分析座標に位置付ける必要があると論じている。町内会こそ良きにつけ悪しきにつけ、地域共同性の中核をなす組織であり、この見通しから一層立体的な、そして生活感覚をくみ上げるような都市中間層の研究が展開することを期待したい。